納豆賛歌

なっとうさんか

第一集

立松和平 他編

島津書房

江苏工业学院图书馆
藏书章

納豆賛歌

島津書

立松和平（たてまつ・わへい）

作家。昭和二十二年、栃木県宇都宮市に生まれる。「自転車」で早稲田文学新人賞、「遠雷」で野間文芸新人賞、「卵洗い」で坪田譲治文学賞を受賞。昭和六十一年よりテレビ朝日「ニュースステーション・こころと感動の旅」のレポーターを務め好評を博す。

塩野米松（しおの・よねまつ）

作家・産経新聞児童図書書評委員。昭和二十二年、秋田県角館町に生まれる。主著書に「父さんの小さかったとき」「藤ノ木山砦の三銃士」「千年ブナの記憶」他。平成四、五、六、八年に芥川賞候補に。NHK衛星放送アウトドア番組キャスターも務める。

納豆賛歌（なっとうさんか） 第一集

平成九年四月三十日 初版発行

編著者 立松和平 他

発行者 村瀬博一

発行所 株式会社 島津書房

〒169 東京都新宿区高田馬場一―一七―二二
電話 東京（〇三）三二〇九―二六六三
FAX 東京（〇三）三二〇九―二一一六
振替 〇〇一五〇―一―一七四七六七

編集 納豆賛歌刊行会
（丸真食品株式会社内）
代表 三次（みつぎ） キノ
〒319-31 茨城県那珂郡山方町山方八二九
電話 〇二九五五（七）三三三七

印刷所 有限会社 ミツギ印刷社
電話 〇二九（二五二）八四八一

ISBN 4-88218-065-0 C0092 ¥952E

納豆賛歌

第一集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

納豆賛歌　第一集　目次

納豆売りの声　立松和平　7
短歌の部
最優秀賞　11
優秀賞　23
佳作　49
選外佳作　85
納豆と豆腐　塩野米松　89

俳句の部
最優秀賞 97
優秀賞 109
佳作 135
選外佳作 171
特別賞 177
選考にあたって 堀江文男 188
あとがき 三次キノ 193

納豆売りの声

立松和平

私が子供の頃、朝は納豆売りの声で目覚めたものだ。たいていは親孝行の子供が、自転車に乗って納豆売りをし、なにがしかの金を稼ぐのである。

「なっとーっ、なっと、なっと、なっとーっ。なっと、なっと、なっとーっ」

こんなふうにして叫ぶのである。私はまだ幼児だったから、納豆売りはできない。父か母から呼びとめられると、納豆売りの少年は嬉しそうな顔をして自転車のブレーキをかける。それからこんなふうにいう。

「青海苔と辛子はどうしますか」

「どちらもください」

母は返事をする。少年は缶の蓋を開き、中にはいっている青海苔を大さじですくい、納豆にかぶせてある三角形の袋を抜いていれてくれる。辛子は裏返しに伏せて

あった茶碗を返し、割箸ですくって納豆を包む木皮の間になすってくれる。多くとか少なくとか注文することもできた。青海苔も辛子も無料サービスだったのだ。

少年は白い息をはき、元気に声を張り上げながら、自転車をこいで遠ざかっていく。あの頃、納豆は十円とか二十円とかいう値段だったのだろう。毎朝必ず、雨の日も納豆売りの少年はやってきたから、私の家では納豆は朝餉の膳にのぼることが多かった。

朝飯前の子供たちのアルバイトは、納豆売りか新聞配達と決まっていた。新聞は決められたところを配達するわけだが、納豆売りは自分の才覚でどのようにもできるのだから、うまみがあったはずである。

納豆は朝に似合う。母は長葱を細かく切ったり、大根おろしをまぜたりした。しらす干しがはいる時もあれば、卵の時もあった。納豆卵の朝は、弟も私も喜んだのである。

あの納豆売りの声が聞かれなくなったのは、いつ頃のことであろうか。私の母は小さな食料品店をやっていた。そんな店でも納豆をおくようになったから、少年た

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ちの商売もあがったりになってしまったのかもしれない。納豆売りの声をもう一度聞きたいものだ。

母の店で納豆を置くようになると、ますます私は納豆を食べるようになった。調理もいらないし、あんな簡単な食べ物はない。椀にとり、青海苔をかけ、醤油をおとし、あとは箸でかきまぜるだけだ。私は大根おろしをかけるのが好きだが、それは手間のかかるほうである。

納豆は偉い。長葱をいれれば長葱にあわせ、卵をかければ卵にあわせる。しかも相手にこびず、納豆としての矜持は失うことはない。食卓では脇役なのだが、納豆の椀の中ではどんな状態でも主役である。しかも見栄えなどまったくなく、誠心誠意納豆としての誇りは捨てない。過度な自己主張はないのに、納豆は自己を見失うことなく納豆でありつづける。うまくて、完全栄養食品であるときている。それでいて安い。納豆は極意を生きているのだ。

私は納豆を尊敬する。

短歌の部 最優秀賞

朝毎に食べる納豆の効目らし湯槽(ぶね)に古稀のわが脚光る

茨城県土浦市　小松崎益看　七十二歳

いじめなどないよボクらの幼稚園納豆みたいに手をつないでる

東京都杉並区　永尾三智子　三十四歳
有希　五歳　（合作）

納豆と声張りあげて朝の路地過ぎし行商今も忘れじ

東京都足立区　中西　佐敏　六十七歳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c